
夢幻漂流記

野中杏禱

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夢幻漂流記

【Nコード】

N6182B

【作者名】

野中杏禱

【あらすじ】

天気を司る天神あまのかみの神子こと、天命守霧衣あまのみことのめみ。総神が飢饉を解いた村で、今でも日照りが続いていると言う。天神より命を下された霧衣は、七つ神と共に、磯羽村を訪れるが　？コバルト2006年度ノベル大賞第一次選考通過作品。

「父上！」

少女が痛々しく叫ぶ。父は今すぐ少女の腕を引く輩を殴り飛ばしたい衝動に駆られながら、その拳を握つてぐつと耐えた。

「父上……お助け下さい、父上！」

痛みで喉が焼ける。こちらを見もしない父に、涙も出やしない。

「静かにしろ。神に失礼ではないか」

がたいのいい男が冷たく言った。

「神の元へと行けるのだ。お前は幸福な娘ではにあか」

幸福……？

ああ、そうか。自分はこれから神の元へと向かえるんだ。

初めから……そうと分かつて此処へ来ていたのに。

少女は村人全員に見守られ、高台へと上がった。

木造の台の下には大量の牧が置かれ、そこに油が注がれる。

村人が一人、また一人と牧に火を放った。

油を存分に浴びた牧は、勢いをつけて炎をあげる。

直に炎は高台を包み、少女を燃やした。

「霧衣様！」

一人の青年が、大きな木造の、日本で言う京の都のような建物の中を駆け回る。

行く先々の部屋を見渡すが、そこに目的の人物はいない。

「……まったく……あんの自己中神子め……」

長く、まっすぐにのびる廊下を見つめながら、ナビキは悪態をついた。

すつと息を吸い、再び叫ぶ。

「霧衣様」

「！」

「痛っ」

勢いよく名前を呼ばれた霧衣は、驚いて爪を切るのに失敗した。唯一の救いだっただのは、切っていたのが足の爪だったことだが、出かける時は常にサンダルで霧衣には、許される事態ではない。

近くで本を読んでいたココロが、「大丈夫ですか？」と声を掛けてきた。

だが、霧衣の怒りはただふつふつとこみ上げる。

すくつと立ち上がると、外に出て同じように叫んでやった。

「ナビキ！」

「霧衣様！」

お互いが厳しくにらみ合う。

足音を立てずにそうつと二人に近づいたココロが思わず背筋を凍らすほど、その形相は厳しかった。

「何の権利があつて、私の名前を呼んだ？」

「何のつて……。あなたの名を呼ぶのに権利がいらいますか？」

「生意気言つな！」

「言います！」

普段は超がつくほど主人に忠実なナビキが、ここまで霧衣にたてをつくのだ。何かよつぼどの事態に違いない。そう判断したココロは、あわてて言葉を取り繕って霧衣をなだめる。

「霧衣様、どうか落ち着いてください。ここはナビキの話聞いて差し上げましょう」

外見年齢と精神年齢はかけ離れていても、ココロの見た目は十二歳ほどだ。子供になだめられているようで、霧衣は黙らずを得なくなつた。

此処は、神と人間、そして神子と悪魂おにが存在する世界 『破魔
大国』

四大神と呼ばれる四つの神と、それをまとめる総神、四大神の神子によって、国の平和は保たれていた。

しかし破魔大国には悪魂が存在し、唯一神の理に抗うことができずそれは、人々を破滅へ導こうとする。

神は実体を持たず、悪魂を滅する事はできない。だからこそ神は、自分達に忠実な穢れなき娘に力を与え、神子としたのだった。

人の心を巢食う悪魂。神子は唯一、その存在を知り、浄化できる者達だった。

「で、用件は何だ？」

霧衣はナビキを睨みつけ、簡潔にそう訊ねた。

霧衣こと、あまのみことのかみ天命守霧衣は、あまのかみ天神の神子だった。大地に日を与え、雨を降らし、時には飢饉を起こす。神子の中でも、もつとも大変といわれるものだ。

だから、霧衣は七つ神という精霊をつくった。風、水、雷、光、火、闇、地のそれぞれを司る七つ神が、天命守の仕事をサポートしていくのだ。

『風』に属す七つ神、ナビキはゆっくりと口を開いた。

「神老会の役人の方がいらしています。霧衣様に今回の任務についてののはな」

言い切る前に、ナビキの体は地に叩きつけられた。長い白髪が宙を舞う。

一瞬の出来事だったので、『地』に属する七つ神、ココロは目を見開いている。それでも彼は確かに見た。霧衣によってナビキの体が殴り飛ばされる瞬間を……。

「……神老会、だと？」

霧衣の瞳がキラリと光った。

ナビキはパチパチと瞬きを繰り返し、殴られた頭をさする。

「あんなじじいたちの話の話を聞く為だけに、私に当分深爪人生を送れ

っていいのか！」

「……ほう」

すさまじく叫んだ霧衣に、ナビキでもココロでもない男の聲がかかる。

ぎくりと肩を震わせた後、霧衣は恐る恐るにそちらを向いた。

神老会。それは破魔大国で一番の聖域とされる神殿で、神直々の配下におかれる老人達のことだ。神老は神の命を受け、神子にそれを伝えるべく彼女達の元へやってくる。そして神老より任務を告げられた神子は、各地へ赴き、必ずや任務を遂行することを絶対とされるのだ。

神子、神老、神。それぞれが右の者に逆らう事は、絶対に許されない。

「……神老様、任務って何ですか？」

「何故お前はそう、嫌な顔をしてしか我らの言葉を聴けぬのだ」

霧衣の後ろに立っていたのは、やはり神老だった。

『水』に属する七つ神、ウォータが勝手に社内へと入れたのだ。

ウォータめ……。後で痛い目にあわせてやる。

心の中でそう一言呟きながら、霧衣は外見年齢十歳のウォータを睨みつけた。

ウォータは自分に利益のある人間にのみ媚を売る現実主義者で、自己中心的な性格の霧衣とは相反している。

「別に……、任務なんて面倒な事はやりたくないなんて思っていないから」

「いや……。思っているだろう。間違いなく」

目線をウォータに向けたまま言うと、神老は激しくつつこんできた。

そんな二人の会話をしばし見届けると、ウォータが間を割って声を発してくる。

「神老様、どうぞ部屋の中へ。気の利かない神子で申し訳ないです」

「おい奴隷、誰が気の利かない神子だ」

「誰が奴隷ですか」

ウオータはきっぱりと言い返し、神老を室内へと招き入れた。

見た目は七つ神の中でも一番幼いくせに、なんと可愛くない奴だろう。

目を細めてウオータの後ろ姿を見た後、続いて霧衣も部屋へと入った。

破魔大国は和と洋が入り混じった世界だ。そんな中でも霧衣は和式な文化が好きだった。ベッドよりは布団が好きだし、パンよりはご飯が好きだ。

社内も、霧衣の趣味に象られており、畳を敷いた部屋に濃紅色の座布団と茶色の座布団が綺麗に並べられている。質素だが、窓際には美しくいけられた花が飾られる、趣ある部屋だ。

濃紅色の座布団には神老が座った。

霧衣はその向かいの茶色の座布団に座り、ナビキによって集められた七つ神が、その後ろに一列に並ぶ。

「で、今回はどんな問題か？」

霧衣が訊ねた。もう先程のように、嫌そうな顔はしていない。

「磯羽村を知っているか？」

「飢饉の村」

霧衣は簡潔に言った。神老が頷く。

「だが、磯羽村の飢饉は、半年前に解除されているんだ」

人間が増えすぎると、食料がなくなり、人の命が必要以上に減ってしまう。だから神は定期的に何処かの村を飢饉にする必要があるのだ。

戒めではなく、理として。

そして今回選ばれたのが磯羽村だった。しかし神老の言葉通り、飢饉は村人が0にならないうちに解除される。神の力の源は、生きる人間が発す生気だからだ。

総神が飢饉を解除した時、魂神の命により、いのまことのかみ生命守が命を生み出し、天神の命により、天命守が雨を降らせる。
だが……。

「天神様からの命は受けていない……」

「我々もだ。つい最近まで知らなかった」

「悪魂ですか」

唯一神に抗える存在、悪魂。

奴らが磯羽村と神を隔離し、飢饉を解除させないように仕向けているのだ。

「恐らくな。だから今回は、お前に磯羽村へと向かい、悪魂を退治してもらいたい」

ふう、と霧衣は溜息をついた。全く面倒くさい話だ。

神ならば、悪魂を絶滅させる力くらい、持っていたらどうなのだ。

まあ、言ってもきりの無い話だが。

悪魂とはこの世に深い未練を持った人間の魂だ。

つまり神が大貧民というジョーカーだとすれば、悪魂は「3」。

唯一ジョーカーに打ち勝つ事のできるカード。そして霧衣たち神子は、まあ4以上のカードという事だ。

だから悪魂は神子にのみ退治することが出来る。聖なる力を秘めた人間は、元・人間の邪心の塊にとっては、これ以上ない天敵ということだ。

「天命守よ。承知の意を」

神老の言葉を聴くと、霧衣は首から下げていたペンダントを外した。

ペンダントは白銀色の六角形の真ん中に楕円形の翠玉が鮮やかに埋め込まれている。

これが、霧衣が天神の神子である証だった。

腕を伸ばして、ペンダントを掲げる。目を閉じてすうつと息を吸った。

「必ずや、その命を果たしましょう。天に誓って（ローカル・ラン）

┌
この承知の意は、神と神子の心が一つになった事を表す儀式。

今この瞬間から、霧衣は天神にその命を預けた事になる。もしも命を果たす事ができなければ、霧衣は神子として用無しと判断され、その命を絶たれてしまうのだ。

しかし神子はそんな事には屈しない。彼女達はいつだって、必ず任務を遂行できるという自信があるのだから。

霧衣の住む社から馬車で三時間ほど走った先に、磯羽村はあった。そこは普段はのどかな村で、市場は人で溢れ返り、子供は外で走り回って遊んでいる。しかし、今の磯羽村は、外には誰もおらず、人に踏みしめられる事のなくなった地面は緩み、風が吹けば砂が舞って最悪目に入る始末だ。

「静かですね」

ナビキが言った。

霧衣は大人数での移動を嫌う為、任務先が遠い時は、大抵四人を連れる事になっている。

今回連れてきたのは、ナビキ、ココロ、ウォーター、そして『闇』に属する七つ神のナイトだ。

「……暑い」

霧衣が唸る。

飢饉が続いた村に来るのは初めてでは無いが、さすが悪魂の力が加わっていると違うようだ。

暑さが半端ではなく、普段は薄いと言われがちな服が汗に濡れてシミをつくった。

「霧衣様……。村人の前で同じ台詞を言わないでくださいよ」

「む……。暑いい〜」

「少しは黙れないんですか！ 暑いのはこちらも同じです！」

そう怒鳴ったのはウォーターだった。七つ神は人間ではないのだから、暑さなど感じなくせに、と霧衣は目を細める。

といっても、水に属するウォーターは話が別で、暑さには弱いのだが。

「だったら水を出せ、ウォーター。このままでは私は溶ける」

手を差し出し、せがむように振った。それをバカにしたような目でウォーターの水色の瞳がとらえる。

「あなたが飢饉を解かない村で、どうやってぼくに水を出せと？」

「天神様の命を受けていない村の飢饉を、どうやって私に解けと？」
また、始まった。霧衣とウォータ以外の三人がそんな目で二人を見た。ウォータの精神年齢は、おそらく十八程度だが、見た目からムキになる心を抑えることが、なぜ霧衣には出来ないのだろう。

まったく……。これでは一体、どちらが大人か分からない。

しかし、霧衣の言う事も一理あった。たとえ悪魂の仕業と分かっているとしても、神の命なしに神子が行動することはできない。悪魂を倒し、神の命を神老へと渡らせる事しか、磯羽村の飢饉を止める方法はないのだ。

「二人とも、もうやめてください。まずは悪魂の存在を明確にしないと」

ココロにそうなだめられると、霧衣は怒りを静めた。

彼には何処となく癒しの力があり、それは七つ神の力ではなくココロの性格の賜物だろう。

「そうだな。とりあえず、外にいる村人を探るか」

気持ちを入れ替え、七つ神たちへと呼びかけた。さっさとやって、さっさと帰る。これが霧衣の信念だ。

磯羽村は小さな村だ。しかし小さな村でも、一日かけて歩き回るにはなかなか体力を使う。しかも、五時間は歩きっぱなしだというのに、未だ一人として村人には会わない。

「疲れた！」

「……霧衣様……」

大木のふと根に腰掛、歩く気力を失った霧衣に、七つ神たちは溜息をついた。

確かに歩きっぱなしは人間……まして女には堪えるだろう。それでも神子としての命を受けている事を分かって欲しい。

「霧衣様、立ってください。このままでは日が暮れてしまいます」

ナビキが言った。社を出たのは辰の刻限の真ん中だったから、既に申の刻限をまわっている。

しかし、霧衣は立とうとしない。

「嫌だ。私は疲れた」

「そうやって駄々こねてる間に悪魂がぼくらの存在をかぎつけますよ」

ウオータがナビキのあとを継いでそう言ったが、やはり効果はない。

「悪魂から現れれば、好都合じゃないか」

確かに。逆に核心をつかれ、ウオータは黙らざるを得なくなる。

「でっ……、でも、霧衣様、これは天神様からのご命令ですし……」

「ココロお……。私の足はデリケートなんだぞう？」

ココロに対しては涙まで浮かべてくる始末だ。

そこで霧衣は、ん？ と首をかしげた。自分を説得すべき輩が、明らかに一人足りない。

「……そういえば、ナイトは何処に消えたんだ？」

思えば、霧衣がへたり込む少し前から姿が見えない。元々無口で一人が好きで奴だから、あまり同行もさせない七つ神だが、連れて来られたで、消えられてしまったらこちらなりに困る。

仕方なく霧衣は立ち上がり、三人を連れてきた道を戻っていった。来た道を事細かに見回すと、脇に広場があった。ナイトはそこで、何か黒い大きなものを眺めている。

「ナイトっ」

霧衣はナイトの名を呼びながら駆け寄った。彼は横目で霧衣を確認すると、再び黒い物体を見上げた。

「何を見てるんだ？」

一言訊ねて、同じくナイトの視線を追った。

なんだこれは。

霧衣は目を見開く。黒いものは元から黒かったものではないようだ。その黒は光を持たず、深い闇の色を秘めていた。さらにそれは

今にも崩れそうで、下には既に崩れた黒いものが、細かく散っている。

「焼け跡だ」

そう言ったのはナイトだった。霧衣の瞳が重くなる。

霧衣がナイトを連れてくるのだらうと、広場の入り口で待っていた三人だが、霧衣までもがそこで留まってしまった為、溜息をつきながら駆け寄ってきた。しかし三人も、その黒いものを見た途端に言葉を失う。

「……雨が降らないから……太陽に焼かれたのかな」

「そんなわけないでしょう」

僅かな望みからココロが呟いたが、ウオータがあえなく否定した。

「だよな」と切なそうな笑顔で言葉を返す。

「まだ新しいですね」

誰一人近づかないそこへ歩み寄ったのはナビキだ。黒いもの炭化した建物をさすって確かめている。

誰もそこに近寄らなかったのは、五人にはそこが何をした場所かが分かったからだ。

飢饉の村へ来るのは初めてではない。その風景を見るのも。

「雨乞いをしたのは最近のようです」

「……そうか」

これは自然の理だ。だけど、悪魂のせい以犠牲になる命が増えていくのなら、それは至って「自然」ではない。

霧衣は空を見上げた。

太陽がさんとさんと降り注ぐ。

「このままでは……次の犠牲者が出るな」

「そこで何をしているっ！」

それは七つ神の声ではなかった。磯羽村に来てから初めて聞く内外の声に、霧衣は首を後ろにやった。

「ここは村と神道しんどうが繋がる聖なる地！ 部外者が立ち入っていい場所では無い！」

神道……。それは一般民たちのみが信じる、死する者が神の元へと向かえる道のこと。だが実際にそれは存在せず、死んだものの魂は生命守により、転生か破滅への道を歩む事になる。

まあ我々神に仕えるものたちは、それを天国や地獄と呼んだりもするのだが。

「悪いな。初めてだから知らなかった」

作り笑いを浮かべながら、霧衣は動こうとしないナイトの腕を強引に引つ張り、広場を出た。

霧衣たちの怒鳴り散らした男は五十五前後に見えた。足早に立ち去る霧衣を、未だ睨み続けている。

霧衣たちは再びあの大木の下に戻った。日は段々と落ち、辺りは薄闇に染まる。

「どうするんですか？ 霧衣様」

「な〜にを？」

「何じゃなくて！ 早くしないと、村はきっと次の生贄を出しますよ」

ウオータが必死になって叫んでくる。七つ神として村の存亡を気にしているのか。いい心構えだ。

だが、彼はいちいち神経質に考えすぎる。もう少し肩の力を抜かなくては、その小さな身には重いのでは無いだろうか。

「霧衣様、聞いてるんですか？」

「ナビキ」

霧衣が呼んだ。ナビキが顔を上げる。

ウオータはやはり聞いていないなと眉を潜ませる。

「村が雨乞いを始めた時期を調べてくれ」

「はっ」

胸の前に拳を沿え、ナビキは頭一つ分顔を下げた。長い白髪を翻して、歩いていく。

そんな時期を調べて何が分かると言っのたろう。ウォータは霧衣に対して嫌悪感しか持つことが出来なかった。

「霧衣様」

「何だ？」

「ぼくはあなたが分かりません」

「だから？」

「ぼくのやり方で勝手にやらせて頂きます！」

「ウォータ！」

ココロが咎めの声を上げた。

しかしウォータはナビキが行った方とは逆側を向き、決別するよ
うに去っていった。

「……ココロ、ナイト」

ウォータの小さな背中を見送ると、霧衣は残った二人の名前を呼
ぶ。

二人が顔を上げたのを確認して、ゆっくりと口を開いた。

「ココロは次に生贄になる人間をつきとめてくれ」

「はい……」

「ナイトは……」

視線を黒尽くめの青年に向ける。黒髪に黒いマントまで羽織った
姿は、太陽の注ぐ磯羽村ではとても暑そうだが、当の本人は汗もか
いていない。

「ナイトはウォータを追ってくれ。見つからない程度にな」

そう言った霧衣は穏やかに微笑んだ。まるで怒って家出した息子
を心配しながらも信じる母のようだ。

「分かった」

これから夜になる。闇はナイトの好環境だ。見つからずにウォー
タを追うのはお手の物。

命を下されれば、ナイトはさっさとウォータを追った。

「……どうした、ココロ？」

皆がそれぞれの命についたところで、ココロのみが、霧衣の傍を

離れようとしなかった。漆黒の瞳と、翡翠の瞳がぶつかる。

「霧衣様は、どうなさるんですか？」

「私には私のやることがある」

ココロから見た霧衣は、男勝りで、面倒くさがりで、適当で。確かにどうしようもない人だし、神子という感じでもないが、どこか頼りになる存在だった。

確かな力を持っているということもあるが、それにプラスして、霧衣は全てを見極める目をもっている。

「僕は……霧衣様のことを信じています」

俯きながら言ったので、霧衣の顔は見なかった。

そうして霧衣の返事を待っていると、不意に視界が暗くなり、さらに暖かいものに包まれる。

「むっ……霧衣様？」

ココロは目を見開いた。自分は今、確かに霧衣に抱きしめられている。

見た目は十二歳でも、ココロの中身は立派な大人。こんな状況になれば、どうしようするし、混乱する。

「ココロ……。やっぱりお前は私の心のオアシスだ」

背中を撫でながら頬を摺り寄せた。全くの子供扱いに、ココロは目を細めて呆れる。

次の瞬間には笑みが零れた。

いつしか辺りは完全に闇に包まれた。太陽の光を存分に浴びた大地は、月明かりに照らされても、どこか暑くらしい。

水を属性とするウォータにとって、暑さは天敵だ。日を浴びすぎると溶けるような気がしてくる。

「大体。霧衣様には誠意というものがなさ過ぎるんだ。このままでは、もっとたくさん人間が死ぬことになるというのに……」

主への悪態を口にしながら、ウォータはずんずんと歩きつめた。

まったく……。イライラが収まりやしない。

瞬間、木々がざわめいた。生暖かい風が肌をかすめる。気のせい
か、腕がべたべたと湿ってきた。日が完全に沈み、気温が下がって
湿気が増えてきたようだ。

ああ……。もう。

ウォータは頭を抱えた。だから飢饉の村になど来たくないのだ。
まあ、悪魂を退治し、雨を降らすためには、ウォータが必要不可欠
なのだから仕方ないが。

「ん？」

ウォータがやってきた先は大きな穴の目立つ草原だった。と、い
っても、草は枯れ果て、細かく砕けた砂が風によって宙を舞う。

そこに、彼女はいた。

「何をしたらっしやるんですか？」

声をかけると、ウォータより頭一つ分高い女の肩が揺れた。

驚かせてしまったかと、つい顔が下がって上目遣いになってしま
う。

女が振り返った。

ウォータは目を見開いた。女はまだ少女だ。年も十五、六といっ
たところだろう。長い黒髪を野放しにし、薄茶色の質素な浴衣をま
とっていた為、後ろ姿はその表情よりも大人びて見えた。

「あ……。ごめんなさい」

無意識なのか、少女が一言謝ってきた。

いや、違う。言葉には理由があるものだ。

少女は泣いていた。

「あの……」

「あっ、これは……。ごめん、舞う砂が目……」

「えっ？」

ウォータは慌てたように少女の手を引き顔を近づけた。

驚かれたように見開かれた瞳の下瞼を、そつと親指で引く。

少女は目を見開くと、腰を引いて抵抗した。

「動かないで下さい。こんな乾燥した砂が入ったとあっては、目によくありません」

「ちが……。大丈夫だから」

少女が体に力を込めると、あっけなくウオータの体は押され、二人は離れた。

後になって、無神経な行動だったと自分を叱咤する。

しかし、いくら異性だといっても、自分は見た目十歳の子供だ。

少女が身をもって抵抗するほどのこともないと思うが。

「すみませんでした。ぼく……」

「あつ、これは違うの。あなたの目が、水色だったから」

「は？」

どうやら少女には、この暗さのせいでウオータの顔が良く見えていないようだ。てつきり村人の誰かだと思っていたため、その瞳の青さに困惑したらしい。

「それも失礼ですね。すみません」

また少女が謝ってきた。暗闇に沈みながらも、その顔に笑みが浮かんでいるのがわかる。はにかむような笑顔は、少女らしさを物語る。

「気にしないで下さい。突然声をかけた僕も悪かったです」

「……座る？」

少女が隣を進めてきた。潔癖なところのあるウオータは、一瞬困ったように足を固めたが、どうせ野宿になるのならどこかに尻をつかなくてはいけない。ウオータは意を決し、少女の隣に座った。

「君いくつ？」

ウオータは顔をしかめた。年を聞かれるのは好きではない。

自分は人間ではないのだから年はとらないのだ。ウオータ自身は自分を立派な大人だと思っているのに、外見から、子供としか言いようはなくなる。

「ま、いいけど」

しばし待ったが答えることのなかったウォータに少女は向けていた視線をそらした。

「じゃあ、名前は？ それも言えないの？」

言えないわけではない。自分にはきちんとした名前がある。

だが……。

「……あなたは？」

「私？ 私は刹希せつきっていうの。十五よ」

十五。年相応の顔つきだ。

「で、あんたは？」

あんた、ね。

その呼び方は相手を見下したものが使うものだ。実際ウォータが霧衣を筆頭とする仲間たちから「あんた」と呼ばれたことはないのだが。

「……ウォータです」

「は？」

刹希はウォータを見ながら瞬きを繰り返した。

自分の聞き違いかと耳を疑う。

「よく聞こえなかった。もう一回言って」

「ウォータ！ です」

今度は言い切るように強く言う。もう聞こえなかったとは言わせやらない。

「……それ本名？」

「はい」

「君って外人？」

「違います。その……水っぱいですから」

人間たちにとって神は偶像に過ぎなかった。

だから神子の存在など知る由もないし、神道なんて、どこから出てきたのか分からないようなものを作り出したりする。

しかしそれは心神によってつくられた人間の心理というやつで。

神の関連者が、そこに介入することは許されない。

だからウォータが七つ神だということは、絶対の秘密だ。

「水っばい？ あー、確かに。目の色とかね」

ウォータの名前に、刹希は心底楽しそうに笑った。

しかし笑われれば笑われるほど、ウォータの眉は八の字に寄って行く。

「でも、水っばいからウォータって、あんたの親も安直ね」

全くだ。反論する言葉もない。

だから名乗りたくなかったのだ。

これからそれを名乗っていかなくてはならないこちらの意をまるで気にしない。そういう人間なのだ。ウォータたちの生みの親であり名付け親　霧衣は。

「どうとでも言ってお下さい」

半分投げやりにウォータは言った。

「でも、きつと素直でいい人なんだ」

ウォータは刹希を見た。

少女は目を細め、大きく開いた穴の向こうを見つめる。

その先には闇しかない。

「別に……自己中心的で勝手な人です」

「ひどい言い方」

そう言っつて刹希は苦笑いをこぼした。

不思議な少女だ。普段はとてもあどけない年相応の表情をしているのに、時折見せる笑顔は全てを悟ったように大人びている。

人間の女というものは、みんなそうなのだろうか。霧衣にも、刹希と似たような節があった。

月が二人を照らす。

今夜は満月だ。

霧衣は橋の上にいた。手すりに肘をつき、思い切り体重を預ける。

「霧衣」

「やつほー。ナイトじゃん。昨日ぶりだな」

片手を上げて軽やかに挨拶をしてくる主に溜息をついて近づく。

「なぜ眠っていない？」

「ん〜？ 寝た寝た。眠りましたよ」

「嘘をつくな。見れば分かる」

「ありやりや。心配してくれてんの？」

霧衣はぼんとナイトの肩を叩くなりニカリと笑った。

「でもそれも仕方ないんだって。だってこの暑さに、昨日の寝床は木だぞ？ もう背中とお尻が痛いなの……」

言い出したら霧衣の言い訳は止まらない。いちいち真に受けていても埒があかないので、ナイトは適当に聞き流した。

「で。ウォータはどうだ？」

「昨晚一人の少女と知り合った。その日のうちに別れ、今は村をあちこち回っている」

「へえ。可愛い子だった？」

ナイトはだんまりだ。まあ霧衣以外の女とは滅多に会わない彼には、意地悪すぎる質問だったろうが。

「じゃあ引き続きウォータの様子を見てくれ。頼んだぞ」

そう言われれば、軽く頭を下げてナイトはくるりと背を向けた。

コツ、コツと足音を立てながら去ってゆく。

彼の背を見送り、霧衣は橋の下を見た。

水は干上がり、今となつては単なる大穴のそれを見つめる。

頼杖をつきながら、目を細めた。

「困るんだよなあ……。あんまり一般人と馴れ合われるのは」

ウォータは市場に来ていた。普段は人で溢れ返っているだろう。「そこ」は、今となっては静かな住宅街のようにも見える。

それでも開いている店はいくつかあって、ウォータはそこに回って見た。

「あの」

「いらっしやい」

店主は小さな背に小さな体の老婆だ。腰が少し曲がり、手を後ろで組みながら、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。

「旅の人かい？」

あまり見ない背格好の少年に、老婆はゆっくりと訊ねた。

ある意味違うが、ある意味正解。

「はい」

「この村に来たって何もなかったらうに。つまらないところだろう？」

ああ、つまらない。暑さは自分の天敵だし、悪魂を倒して雨を降らせたからといって、自分達にはなんの利益もないのだから。

「だけど、そんなことが言えたものか。」

「いえ……」

「これでも半年ほど前までは活気溢れる明るい村だったんだよ。だけど雨乞いにたくさんのお金を生贄を出し……。若い娘は次々といなくなつた」

「えっ？」

思わず声を上げてしまった。

生贄に出されたのは若い娘？ 未だに日照りの続いているままなのだから雨乞いは必ず再び行われる。

「だったら、次の生贄は？」

「なんて……君のような子供に言って分かるのかねえ」

どうやら老婆は、ウォータの容姿が幼子だったので洗いざらい話

してくれているようだ。

なるほど。意外な特権。

「また……、雨乞いは行われるんですか？」

「ああ、次は……明後日だと言われていたかな」

「……生贄は」

「刹希？」

「はい。次の生贄の宣告を受けている少女です。雨乞いを行うのはあさつてだと」

「そうか」

霧衣はまだ、あの橋の上にいた。

情報を入手したココロが、霧衣に駆け寄り用件を伝える。

少女、と呼ばれるのならその女はまだまだ幼いのだろう。降らない雨の為だけに、明後日には命を絶たれてしまうのか。

「霧衣様……」

「ココロ、私をその少女に会わせる」

「え」

会ってどうするんです。

その言葉が喉元まで出かけた。

もし会っても、霧衣はその少女にはなにもしてやれない。

神の存在を伝える事も、生贄になる少女を救ってやることも。霧衣が悪魂を倒さない限り、少女は救われないのだ。

「会っただけだ。別にとって食いやしないさ」

黙り込んでしまったココロに苦いものを感じたのか、霧衣は肩を竦めて笑った。

はあ、と頷くとココロも会わせたくない理由があるわけではないのだから、こちらですと案内を開始する。

橋は熱に焼かれ、色はすっかり荒んでいた。どこを歩いても碎け

た砂が地にまかれ、風が吹けば汗ばんだ肌にまとわりつく。

草木は枯れ果て、落ち葉を踏みぱりっと音がする。まるで葉っぱのミイラだ。

きつとかるうじて立っている家々の柱も、すでにミイラ化したのもがあるのだろう。

そんな立ち並んだ家の中に、刹希の家はあった。

「ここです」

一つの家の前でココロが止まる。

そこは他の家と何ら変わらない、ごく普通の建物だ。

霧衣はジャリツと足を地にこするように踏み出した。家に近づき、ドアへと手を伸ばす。

「何してるんですか!」

扉を開く前に、怒鳴る少年の声がした。

ウオータだ。

「お前こそ、何やってるんだ」

「何って……。あなたには関係ないでしょう!」

「だったら私のことも、お前には関係ないはずだ」

ウオータは口を噤む。

まったくその通りだ。自分が干渉を望まないのなら、自分も他人に干渉してはいけない。

だけど干渉せずにはいられなかった。

「……刹希さんに用事なんでしょう?」

「生贄の少女を知っているのか?」

「! 生贄なんて言わないでください!」

ウオータは必死だった。

霧衣は目を細めて彼を見る。

ああ……。そうか。

「お前が昨晩会った少女は……。刹希なのか」

「え……」

無意識に霧衣が呟いた一言。それに、ウオータは目を見開く。

あまりに驚いているウォータに、霧衣は首を傾げた。

「……僕を、つけていたんですか？」

途端に霧衣はハツとする。ようやく自分が何を口にしてしまったかに気付いたらしい。

ココロが困ったように二人を見回していたが、それにも気付かず霧衣は目を泳がせた。

「いや、つけていたわけではなくてだな。その、なんだ」

しどろもどろに言葉を捜す主に、溜息が出た。先程までの威圧感
は、一体何処に行ってしまったのだ。

「最低です」

その行動も、今の情けない姿も。

我が主として、恥ずかしいかぎりだ。

当の霧衣は、ウォータに最低呼ばわりされて、目と口を大きくば
つくりあけている。よほどショックだったのだろうか。

「うわああ！ ココロおー！」

しまいにはココロに泣きついた。情けなさ倍増だ。

「霧衣様……」

ココロも、半分は呆れたように霧衣をなだめる。本来は僕である
七つ神に慰めてもらうなど、恥だとは思わないのだろうか。

「ウォータのバカ！ うましか！ 私は心配してやっているんだぞ
！」

「はあ？」

「お前が人間の娘なんかにつつつを抜かしているというから、いつ
かお前が傷付くんじゃないかと……」

「霧衣様」

名を呼んだのはココロだ。霧衣が自分より十センチほど身長の低
い彼に視線を変える。

ココロの視線は上を見ていた。

まるで一本の線をなぞるように視線を追うと、建ち並ぶ家の窓か
ら人々が白い目でこちらを窺っている。

その目は　まるでまったく別の生物を見るような冷たいものだった。

「あんた達、誰」

次に掛かった声は上ではなく同じ高さから。

再び顔を刹希の家の扉に向けると、そこには色素の抜けた薄茶の髪を一つに結った、浅黒い肌の少女がいた。

他の村人と同じ、冷たい目でこちらを見ている。

まあ、それもそのはずだが。

何処の誰とも知れない人間が、何の悩みもないようにじやれあって（いるように見えたはず）いれば、飢饉で苦しむ村人からしてみれば、恨めしいに決まっている。

霧衣は一点に少女の瞳を見た。彼女ほどではないものの、少女の瞳も吸い込まれそうなくらい黒い。

一方ウォータはしばし少女に魅入っていた。昨夜出会った少女は暗がりで色がなかった。だからウォータは少女の顔をすっかりは見えない。それでもウォータには分かる。その声を聞き違えるはずは無い。

「刹希さん？」

少女の瞳がこちらを向いた。大きな瞳が、さらに大きく見開かれる。

その水色の瞳には見覚えがあった。

「ウォータ？　なんであんたが此処に……」

あんたの言い方で、昨日のままだ。当然のことだが、それがウォータには嬉しい。

「あの、ぼく、もう一度あなたに会いたくて」

ウォータは震えそうな声を叱咤して絞り出した。息と声が、上手く合わない。

霧衣が今、どんなに冷たい目で自分を見ているのかにも、ウォータは気付かない。

「……どうしたの」

優しい声音だ。最初に霧衣たちを見た瞳の冷たさはもうない。

「僕……」

「ウオータ、はっきり言っちゃったらどうだ」

霧衣が会話に割り込んできた。何だ、この女は……、一体何を言
うつもりだ。

「生贖の少女に同情しているのだと」

は？

この女は今、何を言った。

あわてたように勢いをつけて刹希に振り返る。

黒い瞳が綺麗に丸を作っていた。

「霧衣様！」

とがめたのはココロだ。

それでも霧衣の瞳は、冷たく光る。

「だってそうだろう？ 私たちにこの村の人間を気にかけてやる義
理などない。もてる感情は、同情以外にないじゃないか」

まただ。また霧衣の言葉が、ウオータの核心をついてくる。

そう、自分には彼女に対して同情以外に持てる感情がないのだ。

だって自分は彼女を知らないのだから。

「……全部、知ってたのね。ウオータ」

「はい」

はい。

戸惑いなく答えると、刹希が震え出したように見えた。

「バカが」と小さく呟いた霧衣の声が、耳を掠めたような気がする。
る。

ウオータは知らなかったのだ。

人間が、どんなに強欲で、我儘で、孤独な生き物かを。

「最低……」

ズシン、と心に鉛のような重いものが乗った。この台詞は、
ほんの少し前、どこかで聞いたような気がする。

ああ、自分が言ったのだ。敬うべき主に対して。

あの時、霧衣はわざとらしくココロに縋ってみせたが、本当は傷付いていたのかもしれない。

気がつけば刹希が勢いよく扉を閉めた後だった。

バン！ という音は風に流され、いつしか静寂と太陽の照りつける暑さだけが残る。

ああ……。だから。

太陽は嫌いなんだ。

水の干上がってしまった川には、魚の死骸がミイラのように骨を浮かべ、銀の体は荒んで茶色っぽくなっていた。

この町に色は無い。

全てが荒み、同色と化している。

元々「闇」を属性とするナイトには、それが鮮明に感じられた。

「じゃ」

トンツと軽く背中を叩かれたので、一体何だと振り返ってみると、そこには霧衣の姿があった。

「私は命じたはずだぞ。お前はウォータを見ていると」

「お前たちが来たから戻っただけだ。それまではちゃんと見ていた」
ナイトが無表情に言う。

まあ、命令無視をするとは思っていなかったが、霧衣はナイトの言葉に呆れたように肩を竦めた。

後ろにはウォータと、心配げにそれを見つめるココロの姿がある。

「戻ったのか」

ウォータに向かって訊ねるように呟いた。

彼の水色の瞳が、ギロリとナイトを捕らえる。

次いでウォータはナイトの横を通り過ぎて、川だったはずの穴に入った。

魚の死骸、割れた貝殻、もうこけが生えるほど湿気もないらしい。

こうしてこの村は、全てを無に還すのだろうか。

「魂神が、力を奪われていそうだな」

霧衣が言った。

万物を作り出している魂神にとって、動植物が死ぬのは何より力を失う事態だ。

「それを言ったら、天神様もでしょう」

雨が降らずに大地が枯れれば、天を支配する天神も力を失う。

そうして人間の心が荒めば、万物の心を作り出す心神が力を失い、季節が進まねば時神が。

四大神の力が弱まる分だけ、その全てを支配する総神の力が弱まってしまうのだ。

だからこそ、悪魂の存在は神を苦しめる。

そうだな、と霧衣が笑った。

ウォーターの隣に立ち、干物になった魚を袖にすくう。

「埋めてやろうか」

「え」

聞き返したが、霧衣は答えずに土を掘り始めた。

「霧衣様、葬らざるとも、その魚の魂は既に魂神様の元に」

「魂がなくとも、体はここにあるんだ」

ココロが諦めるよう促すが、霧衣は聞く耳をもたない。

「このまま放っておかれるのは、かわいそうだ」

かわいそう。

人間外の動植物は、大抵純粋な生き物のため、死ねば魂神によって転生させてもらえる。それが何故、「かわいそう」なのだろう。

七つ神がつくられたのは五年前。精神はすでに大人でも、まだ総ての思いを鮮明に感じる事ができるわけではなかった。

ココロが妙な衝動に駆られていると、霧衣はちやくちやくと土を掘り進め、魚がすっぽり収まるほどの穴を作った。

そこに魚を寝かせ、優しくかぶせるように土をかけていく。砕けて砂のようになった土は骨の浮いた魚の体を滑って出張ったそこにたまっていった。

「ぼうつとするな。お前たちも埋めてやる」

「はっ？」

「あ、間違えた。『埋めてやれ』だ」

そう言つと、霧衣はニカリと笑った。

その間違いがわざとだということに、気付かないほど三人は鈍くない。

苦笑したり、肩を竦めたりしながら、霧衣の真似をして魚を埋めていった。

「動物はな、あ、植物もだが、埋めてやると土に還るんだ」
ぼつり、と霧衣が語り出す。

「私たち生き物は、もとは自然によって作り出されたものだから、いずれはそこに還る。人間も、犬も、猫も、花も。紙や筆だってだ」
「でも、霧衣様。命は魂神様が……」

「魂神が造れるのは命だ。肉体では無い。私たちの体は、神では作り出せないもつと不可思議なものなんだ」

この世界に生きるのもは、総てが精神と肉体と魂を持ち合わせている。

精神は心神、魂は魂神によって作り出されているが肉体だけは、神の力ではどうにも出来ない代物だった。

あえて言うなら天神が作り出したことになるのだろうか。天神によつて守られていた自然から、いつしか人間を筆頭とする生物が生み出されていたのだ。

「じゃあ……この魚たちも」

「還るんだよ。土へ。そして大地を潤し、世界を美しくする手助けをしてくれる」

ウオータはまっすぐに今埋めた魚を見た。霧衣とココロの会話が耳に届き、急に魚達が恋しくなる。

ウオータは水だから、川や海、そこで泳ぐ魚達が大好きだ。だから今、ここでたくさんの死骸を目の当たりにするのは、正直辛い。だけど、それが自然の理で、彼らの体が、これから生まれる命を、さらにいいものに変えてくれるなら……。

世界に、これほど愛おしいものはいないだろう。

「ウオータ」

「はい」

「刹希が明後日に、雨乞いの生贄になるのは知っているな？」

「……はい」

「どうしたい？」

段々下がっていた顔を上げて霧衣を見る。

「どう……って」

「見殺しにするか？」

「っ、できません！」

今朝老婆に刹希が次の生贄である事を教えられ、ウォータはようやく気付く事ができたのだ。

少女が、総てを悟ったように笑った理由。

「死」を理解している人間は、その恐怖と神秘性に何かを悟るといふ。

後悔をしないよう、死を美化し、自分にとって都合のいいものに変える。

死が、後悔を生まない事はないのに。

「だったら、あの少女はお前に任せる」

霧衣が言った。

漆黒の瞳がまっすぐにこちらを見る。

任せる？

でも、だけど自分は刹希に……。

「守れ。お前ならできる」

霧衣は一瞬たりとも目を逸らさない。

勝手に、我儘で、どうしようもない人だけだ。自分を何の迷いもなく信じてくれるのは、きつとこの人だけだ。

ウォータは一度こっくり頷くと、一目散に駆けていった。

勢いをつけて踏みしめられた土は緩み、大地を舞う。高く、高く。

太陽がウォータを照らした。

暑い。肌が焼け、頭がくらくらする。

だけど走った。

守ってあげたい。だって、あのこは死ぬには早すぎる。まだ、十五歳なのに。

「霧衣、よかったのか」

「ん？」

くるりと後ろで魚を埋めていたナイトに振り返ると、彼が厳しくこちらを見ていた。

「ウォータがもし、自分の正体を告げてしまったら……」

「ルール違反だねえ」

霧衣はただ苦笑した。

駄目だ。全く危機感というものを感じていない。

「霧衣！」

訴えるように再び名を呼ぶ。

静かだが、確かに響く声で。

彼がこんな風に主を心配すると思っていなかったココロは魚を埋めていた手を止め、顔を上げた。

「ナイト」

「何だ」

「私たちがあいつを信じなくて、誰が信じる？」

それは……。とナイトの口が動いた気がした。

霧衣は逸らさずにナイトを見る。

あの……。総てを見極める目で。

「お前の心配する気持ちも分かる。だがウォータなら大丈夫だ。見かけは子供だが、中身は随分しっかりしているさ」

「……分かった」

仕方ない、といたげにナイトが頷いた。

まだわだかまりが残っているのだろう。

それでも、主が信じると言うのなら……。

それは「絶対」だ。

直に日は落ちた。

刹希の生贄になる雨乞いまで、あと二日。

ウオータは昨夜刹希と出会った川原に来ていた。

彼女は、今日もきつと此処へ来る。

確信のもてる拠所のない自信だ。

かさつと音がした。

ウオータが振り返ると、そこには例の少女。

刹希だ。

「あつ、あの！」

勢いをつけて立ち上がると、刹希はこちらに背を向けた。

歩き去ってしまう。

「待って！」

思わず駆け寄り、その腕を取る。

刹希の肩がびくりと跳ね上がった。

「……冷たい」

「あ……」

パツと手を離すと拳に力を入れる。

自分達は生き物じゃないから、体温は持たない。それでも属性に

よつては温度の高いものもいるが、ウオータは「水」。温かさなど

持たない。

「雨の降らない村だから……毎日暑いのに。変な人」

人、か……。

ウオータは垂らした頭を上げる事ができなかった。

もし自分が「人」だったら、刹希を、霧衣を傷つけないことがで

きたのだろうか。

いや、そんなことは関係ない。

人とか、神とか、きつとそれに大差はない。

だってウオータは知っているのだ。

伝える言葉を。

「無神経な事言って……すみませんでした」
腰を曲げて頭を下げた。

刹希が深く息をつく。音がする。

「本当だよ。こっちは生贄ってこと知らないと思ってたから、あんなに話とかしたのに。同情なんて……ほしくないのに」

「違います!」

ウォータの頭が上がった。

刹希は目を見開いた。

思い切り……、軽蔑してやろうと思っていたのに。彼はこの期に及んでまだ言い訳する気が。

「同情なんて……、してないです。ぼくは今朝まで知らなかったんです。刹希さんが生贄の娘だなんて。だから、昨夜あなたの隣に座ったのは、誓って同情じゃない!」

なんてつまらない言葉だろう。

もっとマシな言い訳はなかったのか。

たとえそれが事実でも、真実を知られた今、彼に笑いかける事はできない。

「今は?」

「え」

「今は……どうして私に会いに来たの?」

同情? 罪悪感? 侮蔑?

胸のうちで、刹希は笑いが止まらなかった。

次はどんな言い訳を、きかせてくれるんだろう。

「……守りにきました」
は?

耳を疑った。守る?

同情の方が、まだ現実味がある。

「あなたを生贄にはさせません。二日後までに雨は必ず降ります」
「……根拠のないこと言わないで」

「必ず降ります」

「降るわけない！　今まで何度雨乞いしても、一度だって降らなかつた！」

「降ります」

「ずるい。その瞳はずるい。」

ウオータの青い瞳が、刹希を捉えて離さなかった。

耐え切れなくなり、刹希の方から目をそらす。

自分よりも幼い、男の子なのに。

きつと、何も分かつてないのに。

「私は……死ぬのよ？」

「あなたは死な　」

「死ぬの！　その覚悟をしたの！　もう、何も後悔は残さない、私は神の元へ行くんだ……って」

その目に光が灯った。月明かりに照らされて一筋。頬を伝う。

「だから、僅かな希望も持ちたくない。期待もしたくない……」

ウオータはまっすぐに刹希を見つめた。

内心、焦りが生まれる。

泣かせてしまった、やはり自分には、守ることは出来ないのだからか。

「生きたいって、思わせないで……！」
「違う。」

彼女は、自分を信じようとしている。

心の奥底で、僅かな希望にかけたいと思っている。

「生きてください」

刹希の肩が重く揺れた。

喉が焼ける。息ができない。

苦しい。嫌だ。

刹希は首を左右に振った。

「生きたいと思わない人なんて、いないんです」

「でも……」

「信じてください。雨乞いなんて、間違った事が続いているはずはないんです」

「私が生きたら……、私の前に生贄になった、女の子達はどのようなの？」

みんな、死んだのに。

私だけが生きていいの？

それって……不公平じゃない？

「あなたの中で生きます」

どくんつと胸が高鳴った。

それはきつと、都合のいい解釈だ。

みんなが、私の中で生きるなんて。

でも……。

それを許されるなら私は「生きたい」。

この世界で、この村で、明日を生きたい。

「私…… 明後日の朝一には、広場の高台へ連れて行かれるの。だから……、明日の夜までに雨が降らなきゃ……」

「絶対降ります。だから、酉の刻には、また此処で会いましょう」

翌朝も、やっぱり晴天。まあ、悪魂を倒していないのだから当然だが。

カン、カン、カン！

数日前、燃え尽き炭化した建物が放置された広場には、新しく高台のようなものが造られている。

「何してるんだ、アレは？」

「何も、何も、雨乞いの準備だろう」

霧衣の呟かれた疑問に、答えたのはナイトだった。

「……無意味な行動になるといいですね」

ココロが願うように呟いた。

霧衣が頷く。

「なるさ。悪魂はもう当に、私の存在をかぎつけているはずだからな」

生贄を阻止されないよう、必ず何か手を打ってくる。

霧衣には自信があった。

「またお前たちか」

高台の建設を眺めていると、後ろから声が掛かった。

声の主は、いつかの此処で出会った男だ。

「あなたも。奇遇だな」

「フン。よそ者がいつまで居座っている。雨乞いまでには村を出て行け」

「何故？」

「見てて気持ちいいもんじゃねえ」

男はそう言くと、持っていた紙袋を持ち直し、広場へと入っていた。

意外だ。雨乞いを良く思っていない男がいるとは。まして、彼は先日、此処は神道がどうか、散々怒鳴っていたのに。

不思議そうに首をかしげると、再びナイトやココロとは違う声が聞こえる。

「彼の娘が、最初の雨乞いの生贄だそうです」

声のする方に、霧衣は目をやった。

白色長髪的美青年がそこに立っている。

「ナビキじゃないか。登場が久しぶりすぎて、誰か分からなかったぞ」

「離れていた間よりも長期間一緒に生活していたんですから、忘れないで下さいよ」

呆れた顔でそう返してきた。

まあ、この会話自体にたいした意味はないのだから、この発言はスルーだ。

「……で、調べてくれたな？」

「はい。雨乞いを始めたのは半年前です」

「総神が飢饉を解除した頃と同じだな」

「総神様とおよびください」

どこまでも、目上の者に律儀なナビキは、そんな些細な事まで忠告してくる。

言葉に似合わない丁寧な敬語がこそばゆい。

「それは、まあいい」

よくないです！ とナビキが返す。

いちいち相手にしては、日が暮れてしまうではないか。

「あの男の娘が、生贄の一番手が」

「はい。あと、その少女は今回の生贄の少女と親友だったそうです」

「親友……」

「はい。全て、一番最初に生贄にされたという少女の祖母が話してくれました」

「そうか」

さて、どうするべきか。

神子として霧衣が活動し始めて、暫くがたった。悪魂の行動パタ

ーンは大体見当がついている。

「三人とも、こちらへ来い」

手を振って、合図してやる。三人は、霧衣を囲んで、円をかいた。いいか、これから私の言う事を」

時刻は酉の刻の一时间ほど前。

少女は一人川原に佇んでいた。

「何をしているんだ？」

不意に掛かった声に、顔をそちらに向ける。

「あ……」

そこにいたのは霧衣だった。

ふいつと頭を背ける。

まあ、霧衣と話したくないのも当然だろう。

「隣、座るぞ」

返事を待たずに少女の隣に腰を降ろした。

少女は横目で一度霧衣を見ると、無愛想な顔つきで唇を尖らせる。

その表情を見れば、霧衣は苦笑して口を開いた。

「ウオータと待ち合わせているのか？」

「だったらなんですか？」

つつかかる言い方。

ウオータによく似ている。

「初めてこの村で雨乞いを行った時の生贄……、お前の親友らしいな」

唐突に本題を切り出すと、少女の目が大きく見開かれた。

「はい……」

「どんな子だった？」

「普通の子ですよ。髪が綺麗で……。それだけが自慢の」

少女は目を閉じて、思い出すように呟いた。立てた膝の下で組まれた手が固く結ばれている。

「雨乞いの日は……、お前もそこにいたのか？」

「はい」

「どんな気持ちだった？」

「……憎かった」

低いトーンで声を発する。

閉じていた目をカツと開いた。

「初めは……、生贄は神様の元へ行けるんだから、とても幸福なことでだと思います。だけど、火を次々と汲む村人達を見て、なんであの子なんだろうって」

辛かった。苦しかった。

父親の名を何度読んでも、彼は下げた顔を上げなかった。
惨めだった。

「誰も……、誰も、助けなかった」

「お前も、か」

「そう……。刹^{わたし}希も」

瞬間、少女の瞳が冷たく光る。

その瞬間を見れば、霧衣は立ち上がり、先日のように大きな穴と化した地上の穴へと入った。

「次はお前の番だな」

「はい。……でも、あの子……、『ウオータ』は、私を守ると言いました」

「信じてるのか？」

訊ねられれば、少女は口角を上げて笑った。

「無理だと思いません。雨は降らないもの」

そう言って空を見上げる。

なるほど、やはりそこは真っ青に染まった快晴だ。

「たしかに。降る気配が一向にないな」

「でしょう？」

霧衣が苦笑気味に言うと、少女はにっこり笑って答えてくれた。
初めに隣に座った時とは、ずいぶんな変わり様だ。

「降るわけない。神様なんて……、いないもの」
「神はいるぞ」

少女の声を遮るように声を発した。
霧衣を見ると、しゃがみこみ、何やら体をもぞもぞと動かしている。

「何して……」

「この村には川が多いな。魚も多かったのか？」

「……元々、漁業が盛んなむらだったから」

そうか、と相槌をうつ。

霧衣は再び、魚を地に還していた。

「葬ってるつもり？」

「土に還すんだ」

「そのこの魂は、本当に還れるかしら？」

「還れるさ。そして生まれ変わる」

「死ぬ瞬間に総てを恨んだかもしれないのに」

「お前のようにか？」

淡々と交わされていた会話が、そこでプツリと切れる。

ポンと、最後に土を固めると、霧衣は少女へと振り返った。

少女はこちらを激しく睨んでいる。

「言っている意味が分かりません」

先程までの笑顔は、もう名残も残っていない。

ただ、恨むように霧衣を睨んでいた。

「そのままの意味さ。お前は死ぬ瞬間に総てを恨んだ」

「私は生きてます」

「違う」

たった一言呟いただけなのに、少女は口を噤んでしまう。

それだけ、今の霧衣には威圧感があった。

「霧衣様っ？」

日は既に傾いていた。

酉の刻が近づいたのだろう。

そこには、目を見開いたウォータの姿。

何故だ。何故この人が今、ここにいるのだ？ 自分は刹希と、酉

の刻に会う約束をした。まさか、また、

「昨日のぼくを、つけたんですか？」

「そんなまどろっこしいことはしない」

そう言った霧衣は、いつものようにふざけるでも、茶化すでもない。至つてまじめだ。

「……っ、ウォータ！」

少女は唇を噛み締めると、苦しそうにウォータに泣きついた。

「刹希さん？」

その彼女は、とても普通じゃない。

一体二人はいつからここにいて、どんな話をしたのだ。

「その女が……、わたしを、もう、生きてないって……」

「は？」

生きてない？

何を言った。霧衣は彼女に、何を言ったのだ。

「霧衣様っ！」

属性は『水』なのに、今のウォータの瞳は、燃えたぎるようにキラキラと光っていた。

「刹希さんに……、何を言ったんですか」

「刹希には何も言っていない」

「は？」

「その女に事実を言ったただけだ」

何なんだ……？

ウォータの頭はごちゃごちゃだった。

霧衣の言葉には全く統一性がない。

刹希に何も言っていない……って、じゃあ今まであなたが話していた相手は誰だ。

「……だから、彼女が刹希さんでしょう」

「馬鹿か、お前は」

霧衣はこの上なく冷静で、一言、そう言っ

「なっ……」

「見極めるべきものを間違えるな」

見極める、べきもの。

今自分が会っているのは誰だ。

刹希さんだ。

じゃあ彼女は誰だ。

刹希さんだ。

刹希さん？

本当に？

彼女は、こんな人か。事前に霧衣に何を言われていたのかは知らないが、傷付いたからといって自分に縋りつくような人か？

違う。

この女は刹希じゃない。

それは予感じゃなく

確信だった。

「あなたは……誰ですか」

「誰って……刹希よ」

刹希を名乗る少女の肩が震えている。

信じたものに裏切られるのは、この上なく辛い事だろう。

彼女がもしも本物の刹希なら、ウォータは彼女を二度裏切った事になる。

だけど、「もし」はない。

ウォータは縋りつくようにしがみついた少女の手を冷たく切り離した。

同じくらい冷たい声で言い放つ。

「じゃあ、どうしてあなたは、“生きていない”んですか」
人間が人間を見分けられるように。

強い動物が恰好の獲物となる弱い動物を見分けられるように。生きていない七つ神には生きていないものを判断することができた。

だから迷いなく言える。

この少女は刹希ではない。

見開かれた少女の瞳が震える。

その表情はいつしか険しくなり、憎しみすら窺える。

「刹希さんは何処です」

けれど、そんなものに屈する七つ神ではなかった。

ウォータが訊ねるが、少女は答えようとしない。

「あなたは誰ですか」

その質問にも、少女はだんまりだ。

しかし、それには変わって霧衣が答えてくれた。

「初めて生贄にされた少女だ。名は」

「黙れ！」

漸く口を開いたかと思えば、それは制止を促す言葉。

悪魂は生前の名を呼ばれるのを嫌うと言う。

それは、恨み以外の感情、優しさ、愛しさ、嬉しさ、総てが蘇ってしまっから。

ああ、つまり、この少女が ……。

「もう五つ目ですよ」

ナビキが疲れたように呟いた。言われなくとも、そんな事は分かっている。

「本当に、いるんですかね。こんなところに」

こんなところ。それは暗く冷たい洞穴の中だ。外界とは違い、冷気のこもったそこはとても寒い。

それでも村人が此処にこないのは、先の見えないこの闇がその不

安を煽るからなのだろう。

「ナビキは霧衣様の言葉を疑うつもり？ それに悪魂が暗くて狭いところを住処に選ぶのは、既に立証されてるんだよ」

「分かってますよ。それに、私が霧衣様の言葉を疑うわけないですよ」

ココロは溜息をついて向けていた顔を前へ戻した。

確かに。「超」がつくほど主に忠実なナビキが、霧衣を疑うわけはないか。

前を歩く少年の背を見ながら、ナビキは言葉を続けた。

「ただ、調べた結果この村にある洞穴は全部で六つです。もう四つも見てきたのに、いた様子もないんじゃない、不安にもなるでしょう」

「言われてみれば……。ココロも少し不安になってきた。このこと後一つ。その洞穴の中に目的の人物がいなければ、今のこの行動は全くの無駄、それどころか、霧衣に危険が及ぶ事になる。」

「その心配はない」

二人の会話に割って入って来たのはナイトだ。冷静に、言葉を紡ぐ。

「この奥に、間違いなくいる」

「何故言い切れるんです？」

ナビキが訊ねる。

振り向いたナイトに、背筋に電気のようなものが走るのを感じた。「俺が“闇”だからだ」

なるほど、この威圧感は、光のない世界だからこそ発揮できる能力の賜物と言うわけか。

七つ神は元々、自然の一部を実体化させ、天命守　つまり霧衣によって命を与えられ、守り神とされた者たちだ。本来は自然なのだから、その属性と意思疎通できたって不思議じゃない。

闇一色のこの場所で、ナイトの言葉を疑う理由もないだろう。

先頭を歩くナイトについていくと、少女はいた。

ココロが駆け寄る。

しかしココロは、寸前で止まった。

「どうしました?」

ナビキが言う。

「行けないよ。恨みの念が、邪気の壁を作ってる。進めない」

まずい。時間がないのに。

早く少女を　　刹希を助けて、霧衣の元へ行かなくては。

刹希は気絶しているようだった。冷たい石畳の上に臥せって、ピクリともしない。

「刹希さん!」

名前を呼んだ。

時間がない。

霧衣が……危ない。

「刹希さん!」

ピクリと刹希の指が動いた。

「ココロ、もう少しです!」

「刹希さん!」

「刹希さん!」

ココロとナビキが同時に叫ぶ。

少女の目が僅かに開いた。

上体を起こし、辺りを見回す。

暗闇に目が慣れていない刹希には、此处は黒一色だ。

何も見えない。

「刹希さん!」

「だれ……?」

見えない相手に不安はあおられる。

此处はどこ。

「僕です! ……覚えているか分からないけど、昨日あなたの家の前にいた……」

家の前……ウォータ?

でも声が違う。

「分かんない、誰？」

「……っ、ウォータが危険なんだ！」

悪魂は神子より弱い存在。

神子は神より弱い存在。

悪魂は神より強い存在。

神から力を分け与えられている神子にとって神の力の残り具合が、悪魂を倒せるかを決める。半年も大地の力を受ける事の出来なかった神は、今はもう大分衰弱しつつあるのだ。

今の霧衣は不利だ。

だからこそ、刹希に頼るしかなかった。

彼女が、霧衣のたった一つの切り札なのだから。

「ウォータが？」

「雨を降らせるには、あなたの力が必要なんです！」

「……私の力……？」

刹希は状況を飲み込めずに混乱しているようだった。

これ以上、説明に時間はとれない。

ナイトが口を開いた。

「誰に此処に連れてこられた」

「誰？」

「早く答える。誰にだ」

誰に……。

あれは……、誰だっただろう。

長い髪、優しい面持、大好きな笑顔。

ああ、あの子は……

私の親友 ……。

少女はギラギラと瞳を光らせて霧衣を睨んだ。

そして、そちらにめがけて手をかざす。

「おのれ……神子め！」

邪気の塊が周囲を舞った。隣にいたウォータに降りかかる。

「うっ……」

「ウォータ！」

正の塊である七つ神にとって、邪気はその力を奪われる。最大の弱点だ。

全て奪われなければ後に回復するが、今『水』の七つ神を失うわけにはいかない。

霧衣は足早にウォータの隣まで駆け寄る。

「神鬼倒力、去！」

人差し指と中指を立てて胸の前でそう唱えれば、僅かに邪気が弱まった。

「ちっ、天神様の力も、大分弱まっているな」

一言悪態をつくくと、ウォータの手を引き、自分の後ろに非難させた。

「霧衣様……」

「喋るな、動くな！ 足手まといだ！」

ウォータは岩の後ろに座り込むと、溜息をついて、目を閉じた。

足手まとい。

霧衣は、おおよそ悪魂をおびき出すのに自分を利用しただけだろう。

普段はふざけたように笑っているくせに、悪魂のこととなると手段を選ばない。

いや、だからこそ、他の七つ神は霧衣に従うのだろうか。

そして、ウォータ自身も、何だかんだで霧衣に逆らう事が出来な

いのは、それが彼女の凄さだと、知っているからなのかも知れない。「ふん。大したことないのね、神子の力って」

悪魂が冷たく言い放った。

その体が黒い靄に包まれ、姿かたちが変わっていく。

刹希の容姿をしていた悪魂は、真黒な長い髪を野放しにし、和の武士のような姿に変わった。

唇は赤く染まり、黒い衣装によく映える。

これが……彼女の本当の姿か。

「雨が降らないよう仕向けていたのはお前だな」

「そうよ。だって総神てば、私が生贄にされた直後に飢饉を解くんだもの。雨乞い自体には何の意味もないのに、わたしが死んだから雨が降るなんて、不公平じゃない」

「どうして、悪魂になった？」

「……どうしてだったかしらね」

悪魂は空を見上げた。ポツリポツリと語り出す。

「生贄になる、一月前よ。私にお告げが来たのは。最初はね、神様の元へ行ける幸運な少女だって言われたわ。幸運の少女の死は痛くも苦しくもなく、幸せだけが待っているって。だから、私全く怖くなかったのよ。むしろ誇ってた。神の元に召される少女。私は神様の元に行けるんだって……」

だけど、恐怖は突如顔を出した。

母上が、その時はやっていた病で死んだ。

「あ……う……っあ」

「母上、苦しいの？ 母上！」

「うう……っ……こ」

「え？ 何？ 母上？」

「ああっ……、ああああっ！」

「母上っ！ 母上……！」

あの病は、死ぬ間に激痛が襲うらしい。母のあの苦しみようが、

頭の中から消えなかった。

「そして……、私の生贄の日が来た」

油でまみれた、木造の高台。

ここに火を汲まれて、私は死ぬんだ。

瞬間、母の死に際が脳裏を過ぎった。

生贄は死ぬ時の痛みも苦しみも感じない。

そんなわけ、ない。

痛いに決まってる。苦しいに決まってる。

死ぬって、そういうこと。

「父上ー！」

男に腕を引かれた。

痛い。

死ぬ時は、もっと痛いんだ。

「父上、お助けください、父上！」

父は、こちらを見向きもしなかった。

声が枯れるほどに叫んだ。

喉が焼ける。涙も出ない。

何度も何度も叫んだら、腕を引いていた男に、神に失礼だと怒られた。

私は神の元へ行ける、幸せな少女だと。

その時には、不覚にも納得してしまった。

でも、

高台に乗せられて、火を汲まれて

急に襲った嫌悪感。

何で、私なの？

私が死んだら雨が降る？

でも、私は死ぬんだから雨が降ったって、私には何の意味も無い

じゃない。母上が生き返るわけでもないじゃない。

嫌だ。死にたくない。

私が死んで、こいつらがのうのうと生きていくなんておかしい。

そんなの、不公平じゃない ……！

「そう思った次の瞬間には、世の理つてのが理解できてた。偶像でしかなかった神の存在も、神子の存在も」

「全てを恨んだのか」

霧衣が小さく、小さく訊ねた。

悪魂が空を仰いでいた視線を霧衣に移す。

「さあ？ でも悪魂になったんだからそうなんでしょうね。ねえ神子、私はこの村と村を飢饉にした総神を許す気はないの」

悪魂の目つきが厳しくなる。

殺してやりたい。

神に愛されたこの女を。

「あんたも」

霧衣が目を閉じた。

再び二本の指を立てて呟く。

「私も、これ以上お前に村を傷つけさせるわけにはいかない」

「無駄よ」

そう答えると悪魂も力を込め始めた。邪気が舞う。

「神鬼倒力、束！」

きつぱりと唱えると、悪魂の体に白い靄のような糸が巻きついた。

悪魂の力を吸う。

やった！

ウオータは岩陰から見ながら胸で叫んだ。

だが、まだだ。

悪魂はニヤリと口角を上げると目を閉じぶつぶつと何かを呟いた。すると、パッと白い紐が砕け散る。

霊力の虚像だった紐は地について消えた。

「無駄って言ったでしょう？ 天神の力が弱まっている事くらい、知ってるわ。ねえ 天命守」

悪魂になって半年にしては、随分詳しいところまで知っている奴だ。

内心焦りを感じたが、ここで我を失ってはいけない。ココロ達が来るまで、霧衣は何とか、時間を稼がなくてはならなかった。

「恨まず死んでいれば、転生できていたのに。不幸な娘だな」

「うるさい」

「お前の魂は、後は消えるだけだ」

「うるさい！ 私は消えない。お前を殺して、もつとたくさん人間を死に追いやって、神を殺す！」

悪魂の後ろに、黒い塊が出来た。

邪気の塊だ。

まずい。あれを受けたら力を全て奪われてしまう。そしたらあの

悪魂を倒せず、霧衣は 死ぬ。

「失せろ！ 神子ー！」

一度右手を大きく上げ、思い切り振り下ろす。

その大きさの割に、スピードは速く、霧衣は避け切れなかった。

しかし、それは霧衣には当たらない。

風がやみ、温かさを持たないぬくもりを感じた。

「ナイトっ？」

「大丈夫か？」

真顔で訊ねてくる。

いや、それはこっちの台詞だ。

「私じゃなくお前だ！ 今当たっただろう」

「掠っただけだ。問題ない」

それでもあれだけ力を込められた邪気を食らっては、力は大分奪われたはずだ。

ヒーローでもないくせに、何を恰好つけているんだ。

そんな事を胸のうちで思ったが、口には出さない。助けてもらっ

て皮肉を言うほど、霧衣は意地っ張りでも無神経でもなかった。

「すまない。力が思った以上に使えなかった」

悔しげに呟くと、同じくらい悔しそうに悪魂が怒鳴った。

「くそう！ 七つ神め！」

悪魂は再び力を込めようとした。

しかしそれは、あえなく遮られる。

『桜子！』

刹希の声だった。ウォータはそちらに顔を向ける。

しかしそこに、少女の姿はない。いるのはココロとナビキの二人だ。

「刹希の声……。何をした……。七つ神！」

「私の力で刹希さんの声を届けているんです。あなたの声も彼女のもとへ響いています」

ナビキが言った。

ウォータはなるほどと息を吐く。悪魂にとらわれているのなら、自分達の力で刹希を解放することはできないだろう。

だが、ナビキの属性は『風』だ。その力で互いの声を風に乗せて届ける事はできるだろう。

『桜子……。いるのね、桜子！』

「お……。のれ……」

名を呼ばれば、悪魂の力は弱まる。

それが生前親しいものだったのならなおさら。

『桜子……。ごめんね。私』

謝らないで、刹希。

謝られたら、私は選ばなくちゃいけない。

あなたを許すか、許さないか。

『私……。あなたを裏切った。あなたが死ぬって、どういふことが……。考えてなかった』

悪魂 桜子は耳を塞ぐ。

聞きたくない。聞きたくない。

『自分が……生贄に決まるまで』
生贄……。

ああ、そうだった。
次はあなたが死ぬ番ね。

「よかったわね刹希。死ねば私と同じになれるわ。また一緒に居られるわ」

口角が上がリ、笑みが浮かんだ。
許さない、許せない。

私は死んだのに、あんたが生きるなんて。

『桜子……、私、生きたい』

苦しげにはかれた一言。

だけど、その言葉に迷いはなかった。

『ごめんね、桜子』

謝らないで刹希。

謝られたら私は、言わなきゃいけない。

拒絶の言葉を。

「許さない」

許さない。許さない。許さない。

私だって、生きたかったんだ。

その怒りは、刹希から霧衣に向いた。

ぎんと睨みつける。

「何で、何で刹希のときなの？ 何で私が死ぬ前に来てくれなかったの？ 何で……？ 何で私が死ななきゃいけないのよ！」

「……それが、運命だから」

そうとしか言いようが無かった。

人の寿命は魂神によって決められる。悪魂が関わってくればそれもまた別だが、桜子の場合は運命だ。

生贄という形でなくても、桜子は半年前に死んでいた。

しかし、今の桜子が、この言葉で納得するとは思えない。

「そんなの、言い訳じゃない！」

『桜子!』

しばし黙っていた刹希が口を開いた。

『亡くなった命は戻らない。だから桜子、もう恨まないで、私が…、私が桜子の分まで生きるから!』

ウオータはハツとした。

それは、自分が少女にかけた言葉だ。

「私の分まで? 冗談じゃない、そんなの……!」

「恨みは、悲しみしか、生まない」

霧衣が口を開いた。悲しみに包まれた魂は、更なる悲しみをまとい、恨みを増やす。

「でも、その名を呼ばれたお前は、優しさも、愛しさも、嬉しさも思い出したはずだ」

生前の、哀以外の感情。

「そんな……もの」

「恨みを捨てて、生まれ変われ。そして次こそ、幸せに生きる」
「な……」

「長く生きられなかったお前は、次は幸せになれる」
魂の循環。

短命だった人間は、生まれ変われば長命に。また生まれ変われば短命に。

そうして、人はいつだって公平につくられているのだ。
霧衣は再び、指を立てた。

「天・地、双方の界を彷徨いし魂よ、今神の元へ。昇天!」
叫ぶと同時に、桜子の体が光った。

成仏の瞬間だ。

「私……生まれ変われるの?」

「ああ」

「また、生きられるのよね?」

「ああ」

頬を伝う、一筋の涙。

『桜子!』

心穏やかに成仏しようとしていた桜子を呼んだのは、刹希だ。

『おじさん……桜子のお父さんが、ずっとがんばってたの。雨乞いを止めさせて、あそこに桜子の……、生贄になったみんなのお墓を建てて。関係ない人に、踏み荒らされないように、ずっと広場を見張って……』

なるほど、だから、あの男は霧衣たちに入るなと言ったのか。

あそこに……、死した少女達が眠っているから。

「うん……。ありがとう、刹希」

そうして、桜子の魂は天に召された。

翌日。

天気は雨。ザーザーと勢いよく降っているにも関わらず、村人は外に出てそれを喜んだ。

「ウォータ」

「霧衣様」

「行くぞ」

ウォータは広場を見ていた。

この雨が上がれば、あの高台も撤去されるだろう。

「あ、そうだ、刹希に会わなくていいのか？」

「はい。昨日、十分話しましたから」

この広場は生贄の少女達の墓場となるらしい。花の種を植え、いつでもたくさんの花に囲んであげたいと刹希は話した。

ウォータたちはこれで村を去る。

悪魂は絶えない。

それは、人間がこの上なく欲深だからだ。

だけど、それは清い上に望んでしまうこと。

「霧衣様」

春には、あの広場にも花が溢れるのだろう。

人の心の弱さはなくなりはない。

でも、支えてくれる友達や家族がいるから、簡単に折れはない。

それでも、闇にとらわれる人がいるなら、それはぼくらが気付か

せてあげよう。

一人じゃないってこと。

だから人は強くなれる。

もっと、もっと。

強く、強く、

強く。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182b/>

夢幻漂流記

2009年6月29日19時14分発行